



企画にあたって

大郷 剛

(国立循環器病研究センター 肺高血圧症先端医学研究部特任部長・肺循環科医長)

米国 Stanford 大学の Eugene D. Robin 先生が Chest 誌に肺高血圧症を “The kingdom of the near-dead” と称した総説を書いたのは約30年前の1987年のことです。当時効果的な治療法がなく、患者はすぐ亡くなる時代でした。そのなかには有効性を示せていなかった当時の肺血管拡張薬の使用を疑問視した言及がされていました。血管拡張薬の研究を推進していた当時 Maryland 大学の准教授だった Lewis J. Rubin 先生はその内容を痛烈に批判し、試行錯誤する血管拡張薬の知見の積み重ねのプロセスは将来の予後改善につながると反論しました。

それから30年が経過する間に有効な肺血管拡張薬が開発され、Rubin 先生が見通したように肺高血圧症の予後は大きく改善し、もはや “The kingdom of the near-dead” ではなくなってきました。しかしこれは治療薬の進歩のみならず、病因病態の解明、診断の細分化、治療薬の使用方法等の多くの知見によるものです。これまでも、そしてこれからも「最新の PH 診療は最良の PH 診療」であり、その時の最新の知見を常に整理し、診療に役に立てていくことが現在の肺高血圧診療のベストプラクティスであり、かつ将来の “根治” につながるのだと思います。折しも2018年にはフランスのニースで第6回肺高血圧症国際シンポジウムが開催され、日本循環器病学会の肺高血圧症ガイドラインも改訂され、最新の知見に関して多くの議論がされているところです。

本企画では肺高血圧症診療のベストプラクティスのために役立つ最新の知見を各分野のエキスパートの先生がたにご紹介いただき、これからこの分野を目指す先生がたにも理解していただけるように解説していただきました。本書が皆様に常に活用され、肺高血圧症診療発展の一助となるよう願っています。